

2017 年レント集会～「十字架と神の国」～

第 6 回「神の国とローマ帝国」ヨハネ 18:28-19:16

1) 背景

(ア) 「神の国」って何？

「神の国」＝「神の支配」＝「神の愛の支配」＝「神の愛に満たされること」

「神の支配」自体でもあり、
神の愛が溢れている場所でもあり、人でもあり、人の集まりでもある。

「神の国」は「死んだあとに行く天国」「やがてくる永遠の神の支配」だけではない。
・・・今ここからはじまる。始まっている。

(イ) 当時のユダヤ人の「神の国」への期待。

「神の支配」に対するその時代の考え。

ユダヤ人・・・どうして私たちはこんなに苦しむのか？

・・・バビロン、ペルシャ、ギリシャ、シリア、ローマの支配下におかれる

→神の支配の下にあるならば、神が正しい裁きをしてくださる
異邦人の支配から私たちを解放してくださる。

⇒ ローマ帝国による支配 ⇔ ユダヤ人の神の国への期待

2) ピラトとユダヤ人

(ア) イエスを訴えるユダヤ人指導者たち

・この人を死刑にする権限は私達にはない・・・ローマの権限でやってくれ

(イ) ピラト

・この人は死に至るような罪を犯していない。・・・ローマにとって人畜無害。

(ウ) ユダヤ人たち（含・民衆たち）

・私たちにはカイザル以外に王はいません。

・・・ユダヤ人たちが、今まで「神の国」の敵であったローマ帝国と手を結んで、
本当の神の国をもたらずイエスを阻止しようとした。

・・・自分の考える「神の国」のために、本当の「神の国」を拒否する。

・・・創世記 3 章のアダムとエバの罪から始まる「この世の国」と「神の国」の戦い。

3) ピラトとイエス

(ア) イエスが語る「神の国」

「わたしの国はこの世のものではない」・・・この世から生まれたものではない。

「わたしはこの世に真理を証しするために来た」・・・この世のためにいる。

・・・神の国をこの世にもたらすために来た。⇒神の愛の支配をこの世にもたらす。

(イ) 「真理とは何か？」

ピラトの関心は「エルサレムの安定」だった。

すでに色々ユダヤ人とトラブルを起こしていて、今度失敗をすると自分の身が危ない。

しかし、イエスは人畜無害である。

「真理とは何か？」と言いながら、ユダヤ人のところに行って、イエスを解放しようとしていた。・・・真理に関心があったわけではない。

(ウ) イエスを十字架につける権威

イエスを十字架につける権威も、赦す権威もあったと思っていたピラト

・・・イスラエルを支配していたローマ帝国の総督。

⇔イエス「上から与えられなければ・・・」

・・・全ては神の権威のもとにある

創世記 3 章のテーマ・・・神を神としないで自分を神とする罪

この裁判は

1) 自分がイエスを裁いているつもりになっていた人々が、
神の裁きのもとにあることを、示している。

2) 本当は裁くべき方がへりくだって、裁かれてくださったことを表している。

(エ) 判決

イエスを十字架につける

・・・イエスではなく、カイザルを王としたユダヤの人々。

・・・騒乱が起こることを恐れるピラト

この世の国は「恐れに支配されて、力で支配する」

イエスの神の国は「愛に支配されて、自分を与える」